

日本台湾学会 ニュースレター

第8号 2004年4月

特集 台湾の人々と大統領選挙

編集部では、2004年3月に行われた大統領選挙に着目し、特集記事を組みました。

今後の台湾をうらなう意味をもつとされた選挙の結果は、一応の結論を導き出しましたが、日本からみると何時になったら「選挙後」を迎えるのか、台湾の政局はまだ不透明であるようにも思えます。

そこで、今回の特集では、総論を石田浩先生に、また、いろいろな専門分野の方々に台湾の人々の眼に映った選挙をできるだけ現地の視点から考えていく手がかりを提示いただくよう原稿をお願いしました。なお、多くの原稿の脱稿時期は4月上旬から中旬にかけてであり、その点御留意ください。（編集部）

台湾総統選挙と公民投票

—民主化過程の産みの苦しみと
本土化への確かな歩み—

石田浩（関西大学）

本年3月20日に台湾において第11期総統選挙と初の公民投票が行われ、民主進歩党の陳水扁・呂秀蓮組が中国国民党の連戦・親民党の宋楚瑜組を3万票の僅差で破り当選した。公民投票は投票総数が有権者の過半数に達せず成立しなかった。今回の総統選挙は、まず「台湾民主化の深化を問う」選挙であり、第二に「東アジアの安定と発展」にとって非常に重要な選挙であった。筆者は3月15日から28日まで台湾に滞在し、選挙戦と投票後の混乱を見届けることができた。特に、各テレビ局が連日流す選挙ニュースに夜遅くまで付き合い、多くの台湾の識者や友人たちと選挙戦とその勝因、落選した連宋陣営の鬱憤晴らしの「抗議行動」等について議論をしたりした。そこで、小論では台湾の将来を問う第11期総統選挙と公民投票について簡単な分析を行い、今後の台湾政局について考えてみたい。

投票当日は高雄に滞在しており、投票締切り直前にホテル近くの投票所に行き開票を待った。投票所には付近の住民や支持者、あるいは各メディア関係者などがゾロゾロと集まり、警官の入所指示まで外で待ち、開票準備ができると一斉に中に入った。選挙委員会職員は投票箱の封印を解いて中を見せ、一票一票読み上げてはそれを我々に見せた。このような公正な開票が行われるようになったのは、戒厳令時代に投票が終わると停電となり投票箱がすり替えられたり、投票箱に特定票が入れられたりしたことがあったことから、このような不正行為を防ぐためである。それゆえ、連宋陣営が要求している再集計を行っても票差はあまり変わらないであろう。投票所での開票を途中まで見学してホテルに戻り、台湾の友人たちとテレビで開票速報を見た。開票速報はメディアにより大きく異なり、チャンネルを切り換えては両陣営の得票数を比較した。午後7時頃には結果が判明するはずであったが、接戦でようやく8時過ぎに当選者が確定し、陳呂組が当選した。連宋組が敗戦の弁を述べるとのテロップが流れ、テレビには目を潤ませた連氏が現れた。連氏は選挙本部に現れて支持者に感謝の辞を述べ、今回の選挙が「不公平選挙」であると捲くし立てた。そして、支持者と総統府前のケタガラン通りに移動し、3月27日の大集会までそこを占拠し、「抗議行動」で不満をぶつけ、高等法院に押しかけて暴力行為に及んだ。

投票率は 80.28%で2000年の 82.69%よりも2.41ポイント少なく、不投票者が約20%であった。選挙結果は、陳呂組が647万1970票(50.11%)、連宋組が644万2452票(49.89%)を獲得し、2万9518票の僅差で勝敗が決まった。少数点第四位を切り捨てれば0.228ポイントの差となり、本年2月28日午後2時28分の二二八事件記念日に行った「人間の鎖」に200万人以上が参加して勢いをつけたことも絡んで、二二八という数値の偶然性に驚かされた。県市別得票率では、当初の予想通り陳呂組が宜蘭県・台中県・彰化県・雲林県・嘉義県・嘉義市・台南県・台南市・高雄市・高雄県・屏東県といった中南部で得票数を伸ばし、連宋組は台北市・台北県・基隆市・桃園県・新竹県・新竹市・苗栗県・台中市・南投県・花蓮県・台東県・澎湖県・金門県・連江県といった北部と客家居住区・原住民居住区・離島において得票数を伸ばしたが、総計すれば陳呂組が過半数を押さえることになった。具体的には、連宋組が台北市で20万票と台北県で13万票、桃園県11万票、新竹県と苗栗県と花蓮県で各7万票と大きく引き離れた。陳呂組は雲林県と嘉義県で各8万票、台南県で20万票、台南市7万票、高雄市で10万票、高雄県で12万票、屏東県で8万票と確実に票差を伸ばしたことである。台湾の選挙は北部の状況、特に台北市を見るだけでは不確実であり、中南部の状況を注視する必要がある。今回、陳呂組は2000年総統選挙に比して各県市で得票を伸ばし、中でも客家居住区と雲林県で善戦したのが大きく影響したと言われている。エスニック・グループの対立構造を残したままであるが、台湾人意識が確実に高まり、陳呂組は過半数を制することができた。

今回の選挙戦において両陣営の政策上の相違点はあまり明確でなく、ネガティブ・キャンペーンのみが目立った。ただ、野党は与党の対中対決不安を煽って中台関係の安定を強調するが、台湾人意識の高まりの中で台湾独自路線は勝利した。特に、陳呂組の勝因として昨年11月17日に成立した「公民投票法」第17条に基づき、総統権限による公民投票の実施を決め、中国の対台湾ミサイル配備に対する台湾の安全を問うという台湾アイデンティティを強調した点を上げることができる。公民投票第1案「防衛能力の強化」は、有権者数1649万7746人のうち744万4148人が投票し、賛成は631万9663人（投票者の84.89%、有効投票の

92.05%)であったが、投票率が45.12%と過半数に達せず成立せず、第2案「中国との協議談判」は投票総数が745万2340人、そのうち賛成は651万1216人(投票者の87.37%、有効投票の91.80%)で、投票率が45.17%で成立しなかった。公民投票は野党の投票ボイコットで成立しなかったが、宜蘭県・雲林県・嘉義県・嘉義市・台南県・台南市・高雄市・高雄県・屏東県では両案とも過半数に達し、台湾人の主張を世界に伝えるとともに、主権在民に基づく初の公民投票は住民自決への第一歩として位置づけられた。

一方、投票前日には陳水扁と呂秀蓮両候補が銃撃されるという突発的な事件が発生したが、両候補者ともに軽傷であったことは幸いであった。この銃撃に対する憶測が乱れ飛び、また同情票が陳呂組に流れたというメディア報道もある。しかし、有権者はこれに動揺することなく投票を行い、落選した連宋組は銃撃事件と無効票(約34万票、投票総数の2.54%)の多いことから「不公平選挙」であったと「再集計」と「選挙無効」を訴える集会を各地で行い、総統府前の混乱は日本のメディアで報道されている通りであり、台湾民主化の困難さを見せつけている。今回の総統選挙は五分五分の戦いであり、どちらが勝つにしても数パーセントの差でしかないと言われていた。無効票の多くは白票であり、票の不正な読み違いとは考えられない。また、日本のメディア情報によると、もし陳呂組が数パーセントの差で勝利した場合は、2000年総統選挙時の国民党中央委員会ビル前で落選者の支持者たちが行った「抗議行動」以上のことが行われる可能性があるため、取材記者は注意するようにという通達があったが、現実にその通りとなった。しかし、連宋陣営は駄々をこねる行動ではなく法律に基づいて不満を処理すべきである。それにしても集会での各種要求は「悪あがき」と思える主張であり、一般民衆はこの行為に対し不満を募らせているが努力して無視している。この結果は本年12月の立法委員選挙において具体化するであろう。大衆集会での煽動の背景には国民党内部の権力闘争や親民党との政治的駆け引きがあり、政界再編に向けての確執がすでに始まっているようである。

ところで、2期目の政権運営に向けて陳総統は、5月20日の就任式においてどのような対中政策を打ち出すのであろうか。1期目の陳政権は対中政策をトーンダウンさせて有権者の期待を裏切ったが、今回は対中対決姿勢を出すことで台湾人意識を刺激して支持を獲得したことから、2期目の陳政権に対する期待は大きく、陳氏はこの期待に応えなければならない。特に、台湾経済の対中依存は拡大しており、経済界が要求する「三通」にどう応えるのか。胡・温体制は陳政権を極力無視しようとするが、これに対して粘り強い交渉が必要となる。また、本年12月の立法委員選挙において民進党は過半数を獲得することができるのであろうか。安定政権を獲得できれば2006年の新憲法制定に結びつくが、新憲法の名称はどのようなのか、中華民国新憲法か、台湾国憲法あるいは台湾共和国憲法か。台湾の前途は多難であるが、民主化への道は確実に開かれており、本土化への道を着実に歩んでいるように思える。

台湾総統選挙と两岸関係 石原忠浩(財団法人交流協会台北事務所)

本年3月に実施された台湾の総統選挙は、現職の陳呂ペアが僅差による再選を果たしたが、今選挙で、主要な対立軸のひとつとして注目されたのは「台湾意識の深化、自立路線の強化」VS「中台関係の安定、将来的な中台統一」など中国に対する姿勢及び台湾の位置づけであった。本稿では、台湾総統選挙における両陣営の两岸政策と中国側の対応を中心に振り返り、最後に今後の見通しにつき簡単に論じたい。

陳水扁が推進した選挙戦は、公民投票、台湾意識の強化といった 이슈に注目が集まったが、その一方で、選挙前年から两岸関係における新たなアプローチを模索していた。陳水扁政権の4年間で台湾の「脱中国化」現象は進展したが、同時に中台間の経済貿易関係も非常に緊密になった。陳総統は政治的には台湾の自立化路線を進めつつも、経済的には中国依存を深めている現状と安定した两岸関係を望む大多数の民意を軽視してまで、選挙戦を戦う余裕はなく、建設的な两岸関係の構築を有権者に提示する必要があった。

2003年の夏以降の動きを振り返ってみると、8月に陳総統は「两岸直航三段階論」という具体的な直航のタイムテーブルを提示し、大陸委員会もその数日後に「两岸「直航」之影響評估」を発表し、直航のもたらす経済上、安全保障上のプラス、マイナス面を併記した。その一方で、两岸直航の実施は国内の共通認識、関連措置の実行及び法制の確立、正常で良好な两岸の相互関係が必要条件であると述べ、現段階での実施は困難であるが、段階的に状況を打開し、两岸直航を実現させるという意欲を見せた。

9月、大陸委員会は「两岸航空貨物便の迅速化」(航空貨運便捷化)を発表したが、同措置は現行の两岸航空貨物輸送政策に違反しない範囲で、两岸の間接貨物チャーター便就航を推進するものとされた。10月、立法院で两岸の人的往来を規定する「两岸人民關係条例」改正案が可決された。同条例改正の背景は两岸における経済活動の増加をふまえ、経済交流の各種規制緩和を盛り込んだ内容であった。

年が明けて2月、陳総統は、防衛性公民投票の第二設問の内容説明に関連して、「两岸の平和と安定の相互メカニズム」(两岸和平穩定互動架構)の構築構想を提出した。同メカニズム構築構想は、两岸における平和原則の確立を原則とし、協議メカニズムの確立、対等互惠の交流、政治関係の構築、軍事衝突の防止を四つの議題として掲げた内容であった。

この一連の動きは、政治的には「一辺一国論」を基本とし、改革を堅持し、公民投票による制憲、台湾意識の強化を訴える一方で、現状維持を求める圧倒的な世論と経済関係を深める两岸関係に留意して、安定した两岸関係を構築する意思を有権者に示したと言えよう。そして两岸直航を含めた三通協議が進展しないのは、中国側の責任であるという立場を示す必要があったのである。

一方野党の国親連盟(藍軍)は、選挙戦の対立軸を当初、経済問題を中心とした民生問題に集中させようとしていたが、与党側の相次ぐ選挙争点の設定により、政策論争で常に後手に回ってしまったことに加え、2003年の下半期以降、台湾経済が回復軌道に乗ったため、藍軍は選挙戦略の修正を余儀なくされた。さらに、与党の『藍軍は、「一つの中国」原則を受け入れ、「一国兩制」を支持している』との攻撃に対して有権者になされた説明は、『我々が主張する「一つの中国とは中華民国である」』であった。しかし、藍軍上層部内でも同問題に関しては「一辺一国論」に反対しないという意見から、「一つの中国、各自表述」を堅持する等様々な意見が存在し、対中姿勢に関する曖昧な感は最後まで払拭する事はできず、同問題に関しては与党側の攻撃を受け続けることとなった。実際、藍軍は何らかの理由で「两岸政策白書」のような文献を公布しなかった(できなかった)。選挙戦終盤になって、連戦は两岸関係の改善は藍軍にのみ可能であると主張し、長期的な两岸関係の平和と安定の構築を目指す、五段階からなる「台湾海峡平和路線図」を提出し、現状維持と安定を志向する有権者に訴えたが、与党が主張する「一辺一国論」、台湾意識の強化、公民投票の実施といった 이슈に比べて、連戦の两岸政策に関する主張は霞んだ感じは否めな

た。

中国側は、台湾当局が提出した、一連の兩岸政策に対して、「選挙向けの言動」と決めつけ、本気で取り上げることをせず批判に終始し、兩岸協議の再開は台湾当局が「一つの中国」原則を受け入れさえすれば、いつでも可能であるとする従来の立場を繰り返すにとどまった。また、96年、2000年の台湾総統選挙への干渉が、結果的には、好ましくない候補者が当選した結果に鑑み、今選挙では台湾当局の言動に対して、徹底的なローキーな対応を取り続けた。その一方で、陳総統が台湾独立につながる言動を発することに関して座視し続けることはなく、以前と異なる手段で対抗した。即ち、台湾に対する圧力のかけ方は直接的なものから、「経美制台」という、北京は台湾問題に対する立場、懸念をワシントン経由で間接的に台北へ伝達し、圧力をかけるというやり方を選んだ。2003年7月と2004年2月の二度にわたり国務院台湾弁公室（国台弁）の高官が訪米し、中国の台湾総統選挙、公民投票における立場と懸念を表明し、暗に台湾へ圧力をかけるよう要求したと報じられた事件はその典型的な事例である。

その一方で、12月中旬に国台弁は「兩岸三通政策白書」を公布し、三通の実現がもたらす中台双方の利益を強調し、兩岸協議を妨害しているのは台湾当局であると批判した。同白書は、暗に台湾の指導者が変われば、兩岸関係は改善されるといったニュアンスが感じ取れる内容であった。

こうして、中国は過去二度の総統選挙とは異なる戦略で、台湾の総統選挙に影響力を行使し、その戦略は半ば成功したかに見えるが、銃撃事件により、最も望まない陳水扁再選という現実を見せつけられることとなった。（当選無効訴訟、選挙無効訴訟は、4月末現在継続中）

今後の兩岸関係は、短期的には5月20日の就任演説で陳水扁が兩岸関係に関し如何なる新主張を提案するかが注目されるが、中国側はしばらく静観するとの見方が大勢であり、陳水扁の言動を仔細に観察しつつ、年末の立法院選挙後に対台政策を調整してから、台湾側に提示するものと思われる。中国の主張する「一つの中国」原則と台湾の主張する「一辺一国論」との間で、どのように折り合いをつけ、三通をはじめとした兩岸協議を再開させるか(しない可能性も否定できないが)注意深く観察していきたい。

@台北

河村裕之（淡江大学）・富田哲（淡江大学）

われわれは、いずれかの陣営の運動にかかわっていたわけでもないし、大統領選挙に関して専門的な分析をする能力も持っていない。日々、台北市内の自宅と淡水の大学の間の往復を繰り返しているに過ぎず、選挙戦を的確に総括するようなレポートを書くことなどできるはずもない。ただ、この地に身を置いていると、1年以上にわたると言ってもいい選挙戦に無関心を装うことも、またなかなか困難である。

選挙が終わり2週間、まだ混乱が続いている。台湾の選挙といえば、「祭り」のようだと形容されるにぎやかさ、告示何百日も前からすでに始まっているような戦いの長さ、そしてそこに感じられる「熱さ」がやはり印象強い。各種メディアの過熱ぶりには疲れさえ覚える。タクシーが支持陣営の旗をなびかせて走る。種々キャラクターグッズが販売される。身近にも選挙にまつわるはなしが多く聞こえてくる。子どもが連れて来たカレ、カノ女に支持を確かめようとする親、近所の店主の支持政党を知りしづらくは出入りしないという人たち…。精神科医が登場し「選挙症候群に注意」と呼びかける。支持が違う（確認できない）と選挙の話は避ける（深入りしない）という慎重さは強くあるが、大喧嘩になるカップルなどもある。「熱さ」の背景には、支持のあり方に自己の歴史経験や認識が反映され、「アイデンティティー」が問われるという面があることが否定できないだろう。むろん投票行動がこれらによってのみ決定されるというつもりはないが、この「熱さ」にふれずして台湾の選挙を語ることは、ぼくにはできない。この原稿の話があったとき、非常に躊躇した。自身の思い入れ（色つきの）が強く、執筆には不適当だと考えたからである。結局いまこうして書いているのだが、立場性を出さずには書きづらいというその思いは、「熱さ」の背景にあるだろうものを一人の外来者としてかいま見てきたということにつながっている。

投票日前日の夜、最後の「造勢晩會」（支援者大集会）が開かれる予定であった会場へ行ってみた。こうした場へ足を向けたのは「禁を破って」のこと、初めてであった。その日中に起こった民進党候補銃撃事件の影響で、両陣営とも大集会は中止していたのだが、三々五々シュプレヒコールを上げている人たちがかなりの人数になっていた。そうしたようすを見ながら、小一時間ほど佇んでいた。迷っていたのだが、中止と聞いて行けたという感じである。「2月28日」に行なわれた「手牵手」（人間の鎖デモ）にも参加したいと思ったが、そうした場には気軽には行けないのだ。熱い思いが感じられるそうした場が、厳しい歴史経験を共有せず「台湾自決」に具体的には何もできないぼくには一種の「サンクチュアリ」に感じられる。思い入れの強さとそれゆえ存在する距離。選挙活動を目に耳にすると、政治情勢を考えると、今までに出会ってきた多くの人たちの顔や言葉が思い浮かんでくる。亡くなった人もいる。戒厳令下、身の危険もあるなかで、台湾の置かれてきた（いる）情勢、ありかたを語っていた人たち。ぼくが初めて台湾に来たのは23年前である。その少し前には「美麗島事件」が起こっている。時代は少しずつ動いていたが、今の状況は到底想像できない時代であった。ベッドの下に隠し置いてある「党外雑誌」を見せ語ってくれた人、授業後訪ねてきて「私は台湾人。でも、それは教室では言えなかった。わかりますか」と言った学生、「あんなところで台湾人が北京語を話しているなんて」と映画のことを作文に書いた学生、危険を犯してまで授業中「台語」で話をした教師…。

今回の選挙後の集まり、混乱のようすにも「熱さ」が見受けられるかもしれないが、背景が違っていよう。いまはこうして何でも発言でき、集会も開けるようになってきている。だが、それを抑えていた方と抑えられていた方という構図が、ついこの前までここには確かにあった。いま抗議の中心にいるのは…??? 勝利した方の陣営、支持者たちは発言、行動を控えているが、それは「自分」を語ることを、「台湾」を語ることを抑えられてきた人たちが中心である。一外来者として、語ることだけは許されるだろうと思いつつ。（かわむら）

私が日々出会い、ことばをかわす人々というのは、しょせん限られた数、層の人々でしかない。また、こと選挙ということになると、相手がどのような考え方の人なのかを知るまでは、ストレートに話をするのをどうしてもためらってしまう臆病さが自分にはある。ゆえに、「現地」（ただ、私にとっては「現地」ではない）の人々の考え方をお伝えするなどという僭越なまえではなく、選挙前後に身の回りで聞きたいいくつかの話を整理し、それに私の感想をつけくわえて一文をものそうと考えていた。元政府高官、「死ぬまでには台湾独立を見たい」とつぶやく人、「我討厭阿扁！」と吐き捨てる人、候補者のテレビ討論を聞いて

どちらに投票するかを決めるという学生、民進党員の学生、・・・、もちろん個々のお話にはうなずける部分があれば反論したくなる部分もあったのだが、それらすべてが私にとっては興味深い語りであった。

しかし、3月20日夜、大勢が判明したことを受けて連、宋両氏が支持者を前におこなった演説は、私に深い脱力感を覚えさせるとともに、頭にえがいていた本稿の内容の多くもふっ飛ばしてしまった。比率からすればゼロに近い票差に対して疑義を持つことが理解できないわけではない。しかし、おそらく興奮状態にあったであろう選対本部、テレビの向こうの支持者を前に、なぜ「結果には承服できない部分がある。しかし今日は帰ってくれ。軽挙妄動に走らないでくれ。後日われわれの考えを表明する。」と言えなかったのだろうか。その直前、陳呂陣営のステージでは、司会者が支持者に対して、勝利の喜びを味わうことができない連宋支持者の心情をおもんばかろう、という趣旨の抑制の効いた呼びかけをおこなっていた。ナイーブだと笑われるかもしれないが、あまりの落差に私はことばを失った。

ところで、元々書くつもりでいたことを一つ。選挙中に多くの人々から、おまえには選挙権があるのかと問われた。初めのうち、私は、台湾籍を持っていないから選挙権はないと、当然のことであるかのように答えていた。しかし、少なからぬ人々はさらに、「でも何年か住んでいれば選挙権が得られるんじゃないのか」とたたみかけてきた。「総統副総統選挙罷免法」によれば、選挙権を持つのは満20歳以上の「中華民国自由地区人民」だそうである。「中華民国自由地区人民」の範囲が、法的に国籍の有無とどのように関係するのか、私にはよく分からない。ただ、いずれにしても、上記の質問をした人々は、「外国人」であるかいなかということと選挙権のあるなしとの間に、それほど厳密な関係を意識していないのではないかという気がする。また、どちらの陣営を支持しているのかと問われることもしばしばであったが、一方で、「外国人であるあなたから見て、台湾の選挙はどうか」といった類の質問は意外にもあまりなかった。私が周囲に「外国人」と認識される存在であることはまちがいないが、そんな私に「外国人」としての選挙観察ではなく、支持候補者の表明を求めることの意味を、立ち止まって考えずにはいられなかった。

以上の二つの違和感は、「外国人」には選挙権、政治的発言権がないのは当然、という考え方が支配的な社会で育ったがゆえのものなのだろうか、それとも勝手な解釈にもとづく思い過ぎなのだろうか。私には今のところ判断をくだすことはできない。ただ最近では、前者であることを期待しながら、当初は驚きをともなった違和感に、むしろ心地よさを感じるようにもなった。(とみた)

大統領選挙見聞記 上水流久彦（県立広島女子大学）

投票日前後に筆者が出会った街の様子を紹介し、今回の選挙について振り返ってみたい。

3月18日台北郊外：筆者は納骨の儀式に出るため知人の家を訪れた。納骨終了後、知人宅で食事がふるまわれた。70歳代が中心のテーブルでは、ある女性が「今回の選挙は若者と年寄りとで投票行動が違う。若者は『2号（連戦）』支持、年寄りは『1号（陳水扁）』支持で、若い人は昔のことを知らないから『2号』を支持する」と説明する。誰かが、「『青い（国民党の色）服を着ているの？』かと聞かれ、『外は青でも、中は緑（民進党の色）だよ』と答えた」という話を紹介する。別のテーブルでは知人とその兄弟が食事をしている。彼らの一人は企業を営んでいるが、職場の雰囲気が悪くならないように職場では選挙の話を禁止しているという。その兄弟の多くは海外に住んでおり、投票をすませると大半がそのまま移住先に戻るため国際空港に向かう。

3月18日台北市中心部：行きつけの足ツボマッサージ店に行く。選挙を見に来たと言うと、まず一人が「ここには5名が働いているが、1人だけ2号だ」という。そこで別のもう一人が、なぜ民進党を支持するのかを語ってくれる。曰く、「マスコミにでる連戦支持者のある人物は、台湾では大きな借金をして逃げたくせに、大陸で儲けている」、「国民党は世界一のお金持ち政党だが、その金は台湾の人々の金だ」、「連戦は大陸がこう言えば、それに従い、ああ言えば、それに従う」などなど。興奮したのか、「国語」に「台湾語」が混じる。隣の客も頷きながら国民党を批判する新聞広告を筆者に見せてくれる。興奮した人物が「台湾は自由な国だ。誰が誰を応援してもいい。ただ連戦支持者にはその理由を聞きたい」と筆者のほうを見る。どうやら筆者の足を揉んでいる人物が連戦支持のようだ。彼曰く、「あなたは選挙を研究するのだから、両陣営の人から公平に話を聞けばいい」。それを聞いた客は「ゲー。ゲー」と軒をかくを振りをした。退屈だというのだ。

3月19日台北市西部：萬華に住む老夫婦を3年ぶりに訪ねる。老夫婦はアメリカと台湾を行ったり来たりしている。会うと早速、特別報道番組を示しながら「陳水扁がどうやら撃たれたようだ」と言う。「死ななかったから、みんな落ち着いているよ」と言って、NHKの大相撲放送にチャンネルを変えた。その時、ある日本の新聞社から筆者の携帯に電話がかかった。台北の街の様子はどうかと聞く。「台北の街は見る限り静かですよ」と答える。まさか、「知り合いは大相撲を見ている」とは言えない。大相撲中継の途中で銃撃ニュースが流れる。主人が「これでまた台湾が少しは世界に知られるだろう」と言った。ホテルに戻り、フロントの人間に事件の情報を伝えると、一人は「冗談だと思っていたけど、本当だったんだ」と言い、別の一人は「自作自演じゃないの」と語った。

3月21日台北市総督府付近：午前9時、票の数え直しの抗議活動を見に総督府前まで行く。会場近くの封鎖箇所付近で「饅頭」数十個を持った外省人風の老婆がタクシーから降りてきた。今度はペットボトル数十本を台車に乗せた同年代の男性がタクシーから降りる。抗議活動をした人々に差し入れをするようだ。参加者に話を聞いてみる。ある中年男性は選挙が不公正だから来たという。20歳代の女性も同じことを述べる。帰ろうとする彼女に会場へと向かう女性（70歳代）から「もう帰るのか」と抗議の声がかかる。すかさず20歳代の女性は「少し休むだけ」と答えた。次に中年の女性に話を聞くと、「あんなに無効票が多いほど、台湾人はバカではない」と怒る。別の外省人女性（40歳代）は「大陸からは『台胞』と言われ、台湾では『外省人』と言われ、私たちはどうすればいいのだ」という。この場で話を聞いた全員が口をそろえて省籍は選挙に関係ないという。だが、彼らの両親または片方の親が外省人が客家人であったことは印象的だった。

3月21日台北市中心部：客家人の王さんと昼食をとる。抗議には行かないという。行くのは極端な人で抗議には関心がないと語る。彼女の父は入院しているが、数名の日本人が隣の患者（福建系本省人）のところに見舞いに来て、「おめでとう」と何度も言うのでうるさいと文句を言った出来事や、「経済が悪くなり、失業率も自殺率も高くなった」と陳水扁政権以降の不満を王さんは話してくれる。そう言えば、連戦支持の足ツボマッサージ師も同じ理由を語っていた。それから「省籍が問題になるのは選挙の時だけで、李登輝がそれを煽っている。国民党が来て50年たち、省籍の違いは普段の生活では感じない。民進党は台湾の発展は台湾人の努力というが、発展したのは国民党の時だ。『黒金』の問題も李登輝の時代だ」とも語っていた。総じて、連戦支

持者は陳水扁の政権能力の不十分さを語る。昨年8月、本省人のある中年の男性と大統領選挙について話をした。彼は政策云々ではなく、台湾人としてどうか選挙では重要なのだと言った。政治運営よりも省籍問題に焦点を置く陳水扁支持者の彼と、連戦支持者とでは選挙の焦点が大きく違う。それとも連戦支持者はわざと省籍問題を表に出さないのだろうか。今回の選挙は前回、前々回の選挙に比べて確かに対立が激しかった。そのなかで銃撃事件も発生した。だが、台湾の人々は総じて冷静で、選挙での対立を深めないように自制もしていた。陳水扁銃撃に関して日本のマスコミの中には台湾の民主主義の未熟さを指摘したものもあった。しばらく前に日本でもある政治家が銃撃されたが、その時に日本のマスコミの多くは日本の民主主義を未熟だと非難はしなかった。日本での報道や論評に一種のオリエンタリズムをみいだすのは筆者だけであろうか。また、選挙の度に日本では台湾と中国の対立が問題にされるが、閩南系の知人から話を聞いていると、「大陸」という「中国」よりも、「国民党・外省人」という「中国」からの独立・対抗が争点となっている。筆者の印象では、それは以前の選挙から大きく変わっていない。

2004年大統領選挙と台湾原住民 石丸雅邦（政治大学大学院博士課程）

様々な事件で終始した2004年の大統領選挙であるが、与党側が野党側に対して僅差で辛勝だったため、野党側から激しい街頭デモが巻き起こった。台湾の政治的立場の対立は、「省籍問題」に起因するといわれている。ところでこの「省籍問題」とは「本省人」と「外省人」の間の差異と対立とされるが、近年、本省人の中でもマジョリティのHolo（福佬・閩南）系の人々とマイノリティである客家系や台湾原住民の人々の間に政治的な立場の違いがあることが注目されるようになってきた。過去の研究では、客家は中道、国民党支持がHolo系よりも多く、原住民になると更に親国民党支持が多く、民進党支持者は極めて少ないという結果が出ている。

今回の選挙の特徴として、客家系の人々が多く住む新竹県市、苗栗県等の地域で、過半数を超えなかったが民進党の票が伸びた。一方で原住民が多数居住する台東県や花蓮県では相変わらず野党優勢で、特に花蓮県においては顕著であった。郷レベルで観察した投票結果のデータを見れば、もっと明らかである。

この中で新たな傾向として興味深いのは台東県での票の伸びである。これは過去に台東県長を勤めた陳建年氏が国民党を離党して民進党政府下で「行政院原住民族委員会（以下「原民会」）」の主任委員となり、彼の功績であるといわれている。以下に筆者が参加した各ケースが、選挙へいかに影響したかを考察してみる。

一、タロコ正名運動

原住民の中のタイヤル族と分類されるグループは、その分類が適切かどうかを巡って長い間議論が交わされてきた人々である。下位分類でセデク亜族とされる人々はタイヤル亜族とされる人々と言語等の面で差異が大きく、別の民族とすべき意見もあった。しかし問題が複雑なのは、セデク亜族のうちのタロコ方言に属する人々が、タロコ族の名称をもって独自の民族としての政府認定を求めてきたことである（これを「正名運動」と呼ぶ）。この声は人口が多い、花蓮のタロコの人々を中心に主張されてきた。

2004年1月14日にタロコ族が政府によって認定された。この措置は民進党への支持を増やすと期待されていた。しかし実際には、タロコの多くすむ花蓮県秀林郷では与党1001票（14.03%）、野党6135票（85.97%）、同じく万榮郷では与党316票（10.10%）、野党2814票（89.90%）で、他の原住民が多数の郷と比べてもとりたてて与党の票が多いわけではない。民族名の問題と投票は直接関係がないといえよう。またタロコを含めた花蓮のセデク亜族でも、誰もがみなタロコ族という名称に賛成しているわけではない。筆者は2004年2月14日に、名称として「セデク族」を主張するグループの会議に参加した。この会議は秀林郷柏雲山荘で行われ、南投県のセデク亜族の人々も参加していた。この会議には「山地原住民」枠の立法委員のワリス・ベリン氏が出席していた。氏はかつて国民党に在籍し、現在は台湾吾党籍である。

二、原住民族権利論壇

2004年2月24日に台湾大学校友会館にて「原住民族権利論壇」が開かれた。この会議では両陣営の大統領候補者を招き、原住民政策について政見を問うというものである。ところが当日来たのは与党側からは民進党副秘書長の李応元氏、野党側からは「山地原住民」枠の立法委員、林春徳氏であった。両氏ともしばらく演説して帰ってしまった。実際のところ、主催者である「台湾原住民族主体聯盟」は、学者のほかは長老教会の牧師が主体で、筆者の見限り、フォーラムに参加していたのは大部分が与党側の人々だった。フォーラムでは原住民自治立法が主張された。これは原住民の与党側の支持者が主張してきたことで、一方、野党側の支持者は原住民基本法制定を主張し、両者は対立してきた。しかし司会や発言者は長老教会の総会議長や玉山神学院長、前原民会主任委員など、原住民界では大物だっただけに、両陣営ともいささか冷やかな反応という印象を受けた。

三、平埔族正名運動

筆者は2004年3月11日に平埔族の正名運動に参加した。午前中は立法院で記者会見が開かれ、選挙後四年以内に「行政院平埔族群委員会」を設立するよう政府に要求した。会場には民進党の立法委員尤清氏および陳道明氏（原住民、比例代表）及び、原民会副主任委員の浦忠成氏が来ていた。平埔族は与党支持者が多いといわれている。というのも平埔族は他の原住民と異なるとHolo語が分かり、また一部には台湾アイデンティティが高まった結果として平埔族である（または血が流れている）と主張する人々もいるからである。平埔族の血があると公に宣言した人物として例えば尤清氏、蘇嘉全氏、蘇煥智氏等がいる。しかし参加した政治家は「行政院平埔族群委員会」設立には賛成ではなく、むしろ平埔族の各族がサオ族やクヴァラン族のケースに沿って、原民会による認定を申請するべきだと述べた。午後は両陣営の選挙対策本部、行政院、総統府に行き、委員会設立などの要求をした。興味深いのは両陣営の対応である。与党側の選挙対策本部では執行長の李宗明氏が会見し、自分は候補者の代理なので、請願書へのサインができないと言った。総統府では公共事務室黄大鈞参議が、現在、行革を簡略化の方向で行っており、委員会を増やすのは困難だと述べた。一方、野党側の選挙対策本部では平埔族の一つ、タオカス族出身という立法委員、劉政鴻氏が出迎えて、快く請願書にサインした。

四、まとめ

台湾の大統領選挙とは、いわば台湾全土をひとつの選挙区とした多数代表制の選挙であり、結局問われるのは票の質でなく、数である。正確な統計がない平埔族を除く台湾原住民は、人口が台湾全体の2%にも満たず、彼らの声は無視されがちである。例えば野党陣営のテレビでの宣伝で「我々の先祖は400年前に中国大陸から渡ってきて...」というテロップが流れていたことがある。この宣伝には原住民はまったく登場しない。しかしこの主張はかつて与党が主張していたことであり、けっして野党側だけ

の問題ではない。アメリカ大統領選挙のように、一国の首長の選挙では外交問題などが主なトピックとなり、マイノリティーの問題は国内問題として、二の次になってしまうのかもしれない。

最後に筆者の感想を述べてしめくりたい。3月19日に銃撃事件が発生してから両陣営支持者の間に一触即発の険悪な雰囲気がかかった。この緊張下、原住民の問題はどこかへ行ってしまった。原住民の知人と話していても、話題は銃撃の真相や総統府前のデモばかりで、原住民としてこの選挙結果をどう考えるかという声はほとんど聞かれなかった。あらゆる議題が選挙を通じて統独問題や政党へと収斂されてしまう。これこそが台湾政治の特色ではなからうか。

関西部会研究大会報告

第1回 関西部会研究大会について 滝田豪（大阪国際大学）

2003年12月6日、関西大学で第1回の関西部会研究大会が開催された。石田浩氏（学会理事長）の開会挨拶に引き続く文化・文学分科会のトップバッターは重枝西子氏の「パイワン・ルカイにおける百歩蛇模様の意味」であった。氏によれば、パイワンとルカイの住居や衣服に描かれる百歩蛇模様は、首長を中心とする集団的アイデンティティの核を成す重要な文化表象であるという。山田仁史氏のコメントを皮切りとした討論では、単なる伝統としてではなく今後の現代的展開にも注目すべきことなどが提示された。続く「戦後初期台南における龍瑛宗の文学活動について」の王恵珍氏は、コメンテーターの澤井律之氏によれば龍瑛宗の実生活から作品に迫る研究を精力的に発表されており、今回も王育徳らとの交流も絡め、短時間の報告にはもったいないくらい豊富な内容であり、座長の下村作次郎氏をして「200枚の論文が書ける」と言わしめる程であった。

歴史・社会分科会はともに日本統治時代を扱った。松田吉郎氏「日本統治時代台湾の信用組合不正事件について」も氏の一連の研究上にある報告で、信用組合で続発した不正事件を、単なる現象にとどまらず小学生の作文から読み解くことで内地人と台湾人の相違をも明らかにした。伝統的な頼母子講等に代わる信用組合は、コメンテーターの鶴嶋雪嶺氏によれば広く近代的経済発展の文脈の中でとらえられる重要な現象であり、討論も第一次大戦に起因する経済状況など多岐にわたり、豊かな時代像が描き出された。やまだあつし氏「大正期台湾の蚕業奨励政策」は、東アジア各国の経済発展に重要な役割を果たし、台湾にも積極的に導入されたが日の目を見なかった蚕業について、研究上の空白を埋めんとするものであった。素人ながら座長を勤めた私には基礎的な事実から説明を受け大変勉強になったが、コメンテーターの河原林直人氏の、総督府の政策でここまで失敗したものを他に知らないとの指摘も心に残った。討論では今後深めるべき諸点について建設的な建議がなされ、まさに学術討論の名にふさわしいものに感ぜられた。

宇田川幸則氏が座長を勤められた政治・経済分科会では、まず石田浩氏「台湾における輸出加工区の現代的意義：産業の高度化と産業価値パークへの転換」に台湾経済の権威としてコメンテーターの中嶋航一氏とともに台湾経済部からまさにその輸出加工区主任の鄧淑瑩氏のご足労くださり、会に重きをなした（私が作成した当日の参加者名簿で鄧氏の「瑩」字が誤っていた。訂正してお詫びします）。報告は現地調査と詳細なデータに立脚するとともに、「根留台湾」をめざす台湾の未来に対する深い思い入れが感じられる熱情あふれるものとなった。思い入れと熱情という点では、報告の最後を飾った「台湾民主主義と市民のイニシアティブ」の吉田勝次氏も負けてはいない。ご自身も深く関わっておられる台湾の市民運動と日本との関係について、自らの実体験も豊富に交えて語られ、極めて興味深かった。他方で李登輝や民進党の現状に対する鋭い批判精神を示されたことも市民の面目躍如たるものといえよう。浅野豊美氏のコメントはそれを国家や民主主義という理論的枠組みの中でさらに精緻化せんとするものであり、現代台湾政治研究に深い示唆を与える討論となった。

閉会挨拶に立った下村作次郎氏は日本の台湾研究の歷程を台湾の変貌過程と重ね合わせて回顧され、私は感動を覚えた。また当日は交流協会の招請にかかる台湾青年訪日団の諸氏も参加された。討論に十分な通訳をつけられなかったのが遺憾であったが、諸氏は懇親会にも参加され、同会は学術交流と国際交流の増進と化した。これを見た私は、本学会が事実(…)と(・)して(…)日台交流の最前線を担っているという実感を新たにされたものである。来年以降も、会員諸氏のさらなる奮起を期待したい。

台湾研究関連情報

国立台湾文学館 下村作次郎（天理大学）

1997年8月、行政院文化建設委員会に文化資産保存研究中心籌備処が成立して以来、台南市政府跡（中區中正路1号）に開館の準備が進められてきた国立台湾文学館が、昨年10月17日に正式に開館した。該館の表玄関には、鍾肇政氏の筆による真新しい「台湾文学館」の看板がかけられていた。

オープニングセレモニーは、新しく改修された該館の芸文大ホールで盛大に挙行された。セレモニーは、陳郁秀文建会主任委員の挨拶にはじまり、初代館長に就任した林瑞明氏の挨拶、そして楊宣勤文資中心籌備処主任の挨拶と賑々しく続いた。この日の司会は楊翠さんがつとめていたが、筆者は、中島利郎氏と10月17日から12月21日まで展覧された「台湾文学百年顕彰特展」に招かれ、この記念すべき開館式に列席する幸運に恵まれた。

該館の設立は、1990年11月に文建会が開催した全国文化会議で出された「南部に大型の図書館を建設」という提案がそもそもの発端である。文建会第二処処長黃武忠氏によると、当時行政院が推進していた「六年国建」の重要政策の一つであった「南北均衡」の精神から「南部に図書館建設」という案が提案されたが、「よくよく検討すると、図書館はすでに多すぎる状況にあり、もし計画に特色がなければ行政院を通すことは難しいと判断し、そこで文学史料の蒐集、保存研究を旨とする『現代文学資料館』の設立に改めて提案することになった。」（陳文瀾「台湾文学史料的新家——台湾文学館」『歴史月刊』2003.10）こうして台湾文学館の建設計画は、1991年に文建会のもとで正式にはじまり、2003年10月17日の開館となったのである。館名は、「現代文学館」から「国家文学館」、さらに「国家台湾文学館」、最終的に「台湾文学館」となった。ただ、該館のホームページは

「国家台湾文学館」となっており、『印刻文学生活誌』（2号、2003.10）に掲載の林瑞明館長訪問記事では、「国立台湾文学館」となっているのでもっとよくわからないところがある。（この記事では「国立台湾文学館」としておく）

10月17日が開館日となったのは、82年前の1921年に設立された「台湾文化協会」の創立日を記念して選ばれた。該会は、戦前に台湾文化の発揚を通じて台湾人の権利促進のための啓蒙運動を推進してきた団体であるが、この日を開館日に選んだことは意義深いものがある。

建物は、冒頭に述べたように台南市政府跡である。お土産に『老建築新生命』（国立文化資産保存研究中心籌備処、2003.10）というきれいな冊子をいただいたが、戦前台南州庁（1916—45）として建てられたこの建物が、今日の台湾文学館に生まれ変わるまでの過程が詳細に説明されている。戦後は、一時期空軍供応司令部（1949—69）として使用され、その後1997年まで台南市政府として利用された。なお、2003年9月には、国定古蹟に指定されている。

開館行事として、作家遊城（10.15～17）があり、私たちも合流して台南市内を見学してまわったが、ここでは旧知の鄧相揚さん夫妻、ワリス・ノカンさん夫妻、李昂さん、陳若曦さんらに出会った。陳若曦さんとは、10数年前にサンフランシスコ郊外に訪問して以来の再会だったので懐かしかったが、陳若曦さんにはおそらく僕の印象は残っていなかったかもしれない。

関連行事として二つの学会が開催されたようだが、「張文環及其同時代作家學術研討会」には、野間信幸氏が、「台日研究生台湾文学學術研討会」には、末岡麻衣子さん、島田順子さん、食野充宏さん、豊田周子さん、橋本恭子さん、赤松美和子さんらが、日本人として参加している。

該館には、「研究」「典蔵」「資訊」「展覽」「推広」の部門が設けられており、今後台湾文学研究の一大拠点としての役割を担っていくことになるだろう。2003年9月には『台湾文学館通訊』が創刊され、12月には2号が発行されている。

『台湾近代史料研究』の創刊について 東京京子（中京大学）

昨年12月に、日本台湾歴史史料研究会の編集により、年3回発行を目標として雑誌『台湾近代史料研究』を刊行した。

これは、中京大学社会科学研究所が中心となって1982年から行っている、台湾史研究の研究基盤整備の一つである「台湾総督府文書目録」の編纂事業に携わっている日台の歴史研究者が、2000年から日本財団の研究助成を受けて、台湾史研究のインフラ整備のために組織した台湾歴史史料研究会の機関誌として発行したものである。

この機関誌の発行は、1998年から行っている日本にある台湾史関係史料の調査研究の成果の一部を一般に提供し、台湾史研究の発展に寄与すること、日台の若手研究者を育成することを目的としている。このため、本書の収録にあたっては次の原則を立てている。

まず、収録する史料については、①台湾史研究にとって基礎的で重要なものでありながら、一般に公開されていないもの、②日本にあって台湾の研究者や日台の若手研究者にとって簡単に入手できない（物理的に利用が困難）史料で歴史的にも学問的にも価値の高い史料、③今まで公開されていない未公開史料、④翻刻した方が研究の発展に大きく寄与すると思われる史料、⑤文書そのものが難解で翻刻しないと台湾の研究者や若手研究者が利用しきれない史料、⑥既に翻刻されてはいるものの、歴史研究資料としては不十分であるため改めて翻刻しなおす必要のある史料、⑦伝記などによって一部又は全部が翻刻されてはいるものの、時代状況などにより改竄されたりしてそのまま史料として利用できないと判断した史料とする。そして、その収録の方法は、文書史料は基本的に翻刻することとし、翻刻に際しては最終版を収録するが、修正過程などが判るようにする。なお、収録史料を学術研究資料として利用できるようにするために必要な最小限度の史料情報を記載し、史料の状況に応じて写真による収録も行う。

また、資料情報として、(a)未発表・未公開の文書情報（文書目録）、(b)史資料発掘情報、(c)台湾史関係文献資料目録、(d)日台の文書・史資料情報の提供、(e)日台の文書館・史料館などに関する情報を収録し、新しい史料としては、日本統治時代に建立された記念碑・寺社・鐘楼・鳥居をはじめとする「もの」資料の調査報告や、台湾にかかわる未発表の写真・錦絵・絵はがきをはじめとする「もの」資料、そして昨年長野県中野市の私家所蔵資料のなかから発見された清朝期台湾の地方公文書といった新史料も収録していく。

なお、昨年12月に発刊された創刊号の目次は、下記のとおりである。

発刊の辞

- ・台湾史研究と歴史史料
— 『台湾近代史料研究』の発刊によせて—
- ・史料翻刻にあたって

新史料紹介

- ・後藤新平関係文書Ⅰ 石塚英蔵書翰
- ・後藤新平関係文書仮目録

史料と資料

- ・上山満之進文書Ⅰ
一 台湾総督府在任中の文書／二 施政方針（総督赴任の際の訓示）／三 上山満之進宛田中義一書翰／四 財界恐慌（台湾銀行の破綻）台湾銀行二関スル善後策／五 台湾施政方針に関する上山総督の訓示草稿／六 上山総督の実業家招待会での演述手控／七 台湾総督府評議会／八 拝謁の際における奏上要目／九 諮問事項／一〇 大正天皇崩御並びに昭和改元に関する上山台湾総督の訓示／一一 昭和天皇踐祚朝見の儀につき上山台湾総督の謹話／一二 大正天皇崩御昭和改元に関する木下信総務長官代理訓示／一三 台湾在職中備忘録

- ・台湾関係文献目録Ⅰ

案内

- ・第三回台湾総督府文書講習会（国立政治大学）

日台湾原住民研究者交流活動の報告 石丸雅邦（政治大学大学院博士課程）

2003年8月23日（土）14：00から19：00、台北木柵の国立政治大学行政大樓7階第5会議室にて、日本と台湾の台湾原住民研究者の交流活動「台湾 & 日本学術界原住民研究座談会」が開催された。

事の起こりは台湾原住民研究会有志の間で、2003年夏に台北で研究会を開こうと話が持ち上がったことからである。同研究会は順益台湾原住民博物館が提供した研究資金をもとに、主に日本及び日本留学の台湾原住民研究者によって組織された研究会である。当会より、政治大学民族学科の教授で同大学原住民族語言教育文化推展中心（ALCD）の主任である林修澈教授に、台北での研究会にて交流を希望したいと申し出たところ、ALCDが会場や台湾側の参加者を手配することとなった。

出席者は、日本の台湾原住民研究会からは14人が参加。うち宮岡真央子、石川豪、石丸雅邦が、双方向の通訳を務めた。台湾側からは、林教授をはじめとする政大ALCDのスタッフを中心に学生、研究者など約40名、うち原住民は12名。中には、台東や新竹からの参加者もいた。

座談会は、土田、笠原両教授による日本側の挨拶と出席者紹介、林教授による台湾側の挨拶と出席者紹介から始まった。

次に林教授から「政大原住民語教文中心工作概要」という題でALCDの業務内容について報告があった。ALCDは原住民言語文化保存と民族教育に携わり、原住民語の教材製作や、能力認定試験を実施した。また近年のサオ族、クヴァラン族、タロコあるいはセデック族の政府による民族認定に深く関わっている。林教授は言語の壁を低くするため、パワー・ポイントを使用し、原住民認定やALCDのデータベースの機能などを説明された。ALCDのサイトでは原住民語の教科書、能力認定試験の問題がインストールでき、またネットの上で模擬問題を答え、その場で正解をチェックできる（アドレスは、<http://www.alcd.nccu.edu.tw>）。

続いて、京都造形芸術大学、京都大学人文科学研究所の山田仁史氏が「焼畑をめぐる儀礼と観念：台湾のオーストロネシア系諸民族を中心に」という題で発表した。赤楊（ハンノキ）の象徴的意味やパスタアイの新しい解釈などについて説明された。

質疑応答の時間では土田先生によるALCDの原住民語へのチェックが行われた。また黄智慧女史から台湾原住民研究会の活動内容、とくに地震や水害のときの募金やメーリングリストによる意見および情報交換などについてくわしく紹介があった。

終了後は歓談交流の時間があった。ALCDがアミ夫婦による野生のゴーヤ（苦瓜）などの入った手料理と濁酒を用意した。料理には漢字とアミ語で書かれた名札があり、アミ語を学ぶこともできた。

今回の活動で日本と台湾の台湾原住民研究者の交流が促される契機になったと思う。今後もこのような交流がますます活発になっていくことを願ってやまない。

第7回現代台湾研究学術討論会 西島和彦（国立明石工業高等専門学校）

2003年9月の6日と7日、関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館にて、台湾史研究会主催の第7回現代台湾研究学術討論会が開催された。初日は、やまだあつし氏（名古屋市立大学）の開会挨拶に続き、張勝彦教授（台北大学民族芸術研究所、交流協会招聘研究者）による基調講演「清代台湾漢人の土地利用について」が行われ、その後第1分科会、第2分科会が開かれた。第1分科会では、張原銘氏（立命館大学大学院DC）「台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察—文化・教育領域を中心に—」、都通憲三朗氏（台湾・東方科技学院）「台湾の日本語教育と唱歌劇」、張修慎氏（台湾・静宜大学）「台湾知識人から見る「大東亜共栄圏」という思想」、第2分科会では、劉宗興氏（台湾・東方技術学院）「台湾の外国為替政策の変化の背景と歴史推移」、楊英賢氏（台湾・環境技術学院企業管理学系）「産業集積の形成、形態とその複製に関する研究—台湾パソコン産業の事例から—」、圖左篤樹氏（関西大学大学院DC）「1960年代台湾紡織産業の発展—科学繊維工業と日本資本の関係を中心に—」による報告および評論・討論が行われた。

翌7日は、第3分科会では、萩原豪氏（学習院大学大学院DC）「台湾における環境政策の現状—永續発展のための政策」、洪國財氏（大阪大学大学院DC）「災害におけるメディアの情報伝達—情報収集を例として」、第4分科会では、今井孝司氏（甲南大学大学院DC）「台湾総督府の提供した福祉水準—「ナショナル・ミニマム」変化の過程—」、龔玉齡氏（滋賀県立大学大学院DC）「台湾における高齢者の介護—雲林県の事例調査を中心に—」、楊鈞池氏（国立高雄大学政治法律学系）“Globalization and Transformation of the Model of Developmental State: Comparing the Cases of Japan and Taiwan after the 1990s”の報告が行われ、最後に石田浩教授（関西大学経済学部）による閉会挨拶をもって閉幕となった。

土地所有形態の形成の背景、土地所有権の取得および土地所有形態の変化等の面から清代台湾漢人の土地利用状況を説明する内容の基調講演に代表されるように、今回の学術討論会においては、台湾理解にとって極めて重要と思われるテーマを扱った数多くの報告がなされ、それらについての討論も非常に活発に行われた。精緻な分析に基づき各種の構造・関係・変化に考察を加える内容の報告がなされる一方、近年社会科学領域で注目されている「ポストコロニアリズム」概念を軸として台湾社会の展開を論じたものや、「大東亜共栄圏」思想の再検討を試みる内容の報告など、概念・思想そのものをその主題とした報告もみられた。

特に、積極的な意見交換がなされた故印象に残るものとしては、台湾パソコン産業の優位性の確保についての産業集積の複製戦略の重要性、すなわち集積の継続よりも集積の他所での複製を重要視する意見に関する議論や、日本統治下で展開された福祉制度は他の列強植民地や中国大陸でのそれよりも先進的かつ包括的なものであり、社会統制にさえ寄与したというところらえ方に対する議論などを挙げることができる。豊富な現地調査や聞き取り調査を十分に活用した内容の報告も多く、また実証的な論証をめぐってはその結論はもちろんのこと、論証過程に対しても疑問が投げ掛けられる場面も見られ、参加者全体にとって有意義な学術討論会であったといえよう。

日本・台湾大学院生による台湾文学シンポジウム（原題：台日研究生台湾文学学術研討会） 張文薰（東京大学大学院博士課程）

2003年10月17日、台湾文学関係者が永年待望してきた「国家台湾文学館」は台南市に幕を開けた。経費を惜しまず旧台南州庁

(1916年築)を内装から外壁まで改築して文学館としたこと、「台湾文化協会」成立の10月17日(1921年)に式が行われたことから、同館の上級単位である行政院文化建設委員会の気迫が伺われる。さて該館のお披露目も兼ねて、開館式と前後して一連の展覧会及びシンポジウムが開催された。その一環として10月4日～5日に行われたのが、「日本・台湾大学院生による台湾文学シンポジウム」である。

本シンポジウムの主催機関は、行政院文化建設委員会の委託を受けた国立中山大学中国文学系・現代文学研究室である。中山大学は台湾文学研究の領域では新興機関であるが、学会主催者に指名された背後には、台湾文学研究が少数の大学に集中している現状を正そうとする文化建設委員会の配慮が伺えよう。

本シンポジウムの特徴は報告者を大学院生に限定した事である。この試みは日本・台湾を問わず異例であると思われるが、それには以下の経緯がある。2002年6月、毎年恒例になっている文化建設委員会の派遣による「台湾作家訪日代表団」が来日した際、同団は日本の大学院で台湾文学研究に従事する日本人学生・台湾人留学生が多数存在する状況を看取した。その後、団長であった文化建設委員会第二処処長・黄武忠の発案により、日本・台湾の大学院生同士による交流の場が設けられることになったのである。

本シンポジウムの報告者は、台湾の大学院生10名、在台湾日本人留学生1名、日本の大学院生5名、在日台湾人留学生2名の計18名である。これに対して司会とコメンテーターは各専門の研究者が担当した。対象とされた時代は19世紀末から現代までと長く、分野も多岐に渡った。例えば戦前の日本語文学、古典漢詩文、当代作家小説、日本・台湾の歌謡等である。報告の多様さを反映してか、各報告及びコメントでは「多様な台湾文学」という言葉が頻用されたが、この言葉はシンポジウム冒頭に行われた政治大学・陳芳明教授による基調講演「台湾文学史の構築」(原題:「台湾文学史的建構」)の中で提出されたものであった。この言葉の頻用に象徴されるように、シンポジウムの参加者が自らの研究テーマの台湾文学史における重要性を強調する姿勢が実に印象的であった。

取えて遺憾な点を挙げれば、大会では公用語として中国語のみを採用し、通訳を置かなかったことである。無論、台湾研究に従事する以上、北京語さらには台湾語の習得が前提であるとは言え、学習途上にある院生報告者が多数参加するという状況を考慮すべきではなかったか。というのは、学会発表のように臨機応変な応答が要求される場では、非ネイティブの報告者の心理的負担は大きく、それにより討論が低調になる怖れがあるからである。そのためか、本シンポジウムの最大の目的である「日台交流」が低調に終わったのは残念であった。

だが、言葉の壁を越えた交流は今後ますます重要性を増すと思われる。台湾文学を多元的視点から考察し、研究を活性化させるためには、日台研究者による相互交流と相互協力が不可欠だからである。例えば本シンポジウムにおいて、台湾側の報告が、戦前戦後の「漢語」文学(古典の漢詩文も含むため、ここでは「漢語」文学とする)に関するものが多い一方、日本側(在日台湾人留学生と在台日本人留学生を含む)の報告は戦前の日本語文学に関するものが多いことは目立つ。このように両者の異なる研究範囲及び視点は、相互補完的でしたらあった。「台湾アイデンティティ」の形成が盛んに論じられる現在、台湾人精神史のルーツを語る戦前の台湾文学を研究する必要性は高まっている。その反映もあってか、現在台湾において、戦前の日本語文学は、作家作品集や資料集という形で中国語訳が進められている。それらを研究するためには原文の精読及び当時の日本国内の社会・思想背景に対する理解が不可欠であり、かつ日本側との相互協力及び相互理解を深める必要があろう。これはまた、日本側にとっても同様であると思われる。

台湾文学が世界に注目されつつある現在、「国家台湾文学館」の開館及び一連のシンポジウムの開催は、台湾文学の持つより大きな可能性を発見していく好機となるだろう。とりわけ若手研究者は今後の台湾文学研究の将来を担う人達であり、その意味においても、本シンポジウムの開催を通じて日台の台湾文学の若手研究者が一堂に会し、台湾文学研究の現状を認識し、その可能性を模索する機会を得た意義は誠に大きい。今後、台湾文学及び研究をより活性化させ、豊富なものとするためにも、日本、台湾に限らず、各地域の研究者による相互交流の場を維持し拡大していく事が不可欠と思われる。今後に期待したい。

張文環と同時代作家シンポジウム (原題:張文環及其同時代作家學術研討會) 橋本恭子(一橋大学大学院博士課程)

2003年10月17日、台南に設立された国家台湾文学館で開館セレモニーが華々しく挙行されたが、翌18日、前日の熱気が冷めやらない同じ会場で、「張文環と同時代作家シンポジウム」(静宜大学中文科・台文科共催)が開催された。張文環の生まれ故郷である台中県の県立文化センターから、2001年8月、画期的なCD Rom版『張文環日本語作品及び草稿全編』が、2002年3月には中国語訳の『張文環全集』が出版されたが、それ以後、初めて企画された張文環をメインテーマに据えたシンポジウムである。

この時期、台湾文学関係のシンポジウムが集中し、論文発表者が思うように集まらず、プログラムを多少変更せざるを得なかったというが、それを補うかのように全体的に様々な工夫が凝らされ、非常に充実した二日間となった。第一日目には陳千武氏の基調講演に続き、張文環の代表的な中編小説「閩雞」を改編した芝居が演じられ、二日目には現在編纂が進められている楊雲萍・黃得時等の文学全集についての座談会及び、今後各地の大学に新設される台湾文学科についてのセッションが組み込まれ、終了予定時間を一時間もオーバーするほど、熱気にあふれたディスカッションが展開された。発表論文は以下の通りである。

野間信幸「張文環作品裡所表現的漢文教養」

陳建忠「一個殖民地作家的自畫像—論張文環小説中的「成長」主題」

游勝冠「轉向?還是反殖民主場的堅持—張文環〈父親的要求〉」

橋本恭子「試論張文環の小説書寫—以〈閩雞〉為例」

張文薰「風俗小説的迷思」

趙天儀「日治時期台灣新詩:以楊雲萍《山河》詩集為例」

趙勳達「帝國觀點與左派思考的衝突—論《臺灣新文學》(1935-1937)上台、日籍作家對「殖民地文學」的歧見」

張靜茹「日治時期台灣傳統文人的遺民意識與文化鄉愁:林癡仙及其他」

張季琳「楊逵與沼川定雄 台灣人作家和台灣公學校日本人教師」

王惠珍「浴火鳳凰—關於龍瑛宗的台南時期兼論《女性素描》」

施懿琳「決戦期台湾漢詩壇的國策宣傳與異聲」
江寶釵「黃得時古典文學論述及其問題」
彭瑞金「張文環在決戦時期的文學發言與創作」

初日は張文環の作品をテーマに、二日目は張氏と係わりのある同時代作家について報告がなされたが、以上の論文に上記の日本語及び中国語版全集が十分活用されていたことは言うまでもない。

発表論文の中で特に全体の注意を引いたのが、游勝冠と張文薫の二論文である。游は野間信幸から柳書琴・張文薫へと引き継がれた「父の要求」論について、彼らがいずれも同作品を「左翼知識人張文環の『転向』」と見做していることに対し、異議申し立てを展開した。一方、張文薫は「父の要求」を「転向」から「風俗小説」への転換という日本プロレタリア文学の流れに位置づけ、張文環の文学についてはほぼ定着した「風俗小説」という意味づけを捉え直した。

彼らの論文とそれを巡るディスカッションを通して、思いがけず明らかになったのが、台湾と日本の研究環境の差異である。つまり、近代日本文学にとって極めて重い「転向」というテーマを張文環の身に即して考察しようとしたとき、「台湾意識」の高まりが文学研究にも直接反映する台湾で、台湾文学研究の中核を担う游勝冠と、そうした熱気には距離を置き、日本留学の成果を着々と挙げつつある張文薫の間に、解釈の違いが生じるのは当然であった。それはまた台湾文学に向き合う、台湾と日本の研究環境の温度差のようにも思われる。

実際、この二日間を通し、台湾では台湾文学をめぐる状況も、研究環境も刻々と変化しつつあるのを肌身に感じ、日本の研究者が今後それをどうフォローしていったらよいものか、困難の大きさを感じざるを得なかった。また、陳萬益先生が休憩時間に、今回、台湾人研究者たちの間で交わされた、熱気を帯びた忌憚のないやり取りが、いつかは台湾と日本の研究者の間で交わされるようになれば、とおっしゃっていたことが印象に残った。

第三回台湾総督府文書講習会参加記 鈴木哲造（中京大学大学院博士前期課程）

中京大学の台湾総督府文書調査団に参加させて頂いている関係から台湾の国立政治大学で講習会が開催されることを知り、私は、ぜひ受講したいと思った。それは、私の研究分野が日本統治時代の台湾であることに加え、講師陣も日本近代史、台湾近代史の各分野で活躍中の諸先生方が招請されており、台湾総督府文書を使った最先端の研究報告やその史料論、日本国内の各文書館の現状と展望といった現在最もホットな問題を題材としていること、また、何よりも台湾で研究者をめざしている台湾の大学院生達と交流を深めたいと思ったからである。

講習会は、10月24日から同26日までの3日間行われた。日程は、ハードであった。初日を除いて8時10分から講義が始まり、昼食をはさみ、終わりは、17時20分である。一日全6コマ（1コマ=70分）みっちり講義で埋まっており、終わった時には、もうヘトヘトであった。その分、講師陣は、充実しており、台湾総督府文書の総論から始まり、史料論、新聞史、医療史、経済史、政治史、宗教史、法制史、人事問題、戸籍制度問題とほぼ台湾近代史全般の分野にわたって網羅されていた。また、講義というだけあって研究報告だけではなく、台湾の院生達に対して台湾総督府文書を活用することにより研究がどのような広がりを見せるのかといった研究深化の可能性や台湾総督府文書を使うにあたって如何なることを押さえておくべきかという台湾総督府それ自体の構造、文書の成立過程、文書構造等といった基本的知識、さらに各分野別における現在の研究状況と今後の研究課題を加えたいわゆる研究を進めていくにあたっての礎となる知識を教授していこうというコンセプトが共通してどの先生方からも強く感じ取ることができた。また最終日には、日本の国、県、市町村レベルにおける各文書館の資料保存の現状と展望といった現在日本国内でも重要な論争となっている問題について、その概要と文書館の利用方法などを懇切丁寧に講義していただいた。それらのことは、日本統治期の台湾史を研究していこうと思っている台湾の院生達にとって有意義であったと思うし、これから修士論文を書かなければならない基礎的知識の乏しい私にとって大変勉強になった。

講義とは別に古文書講読の時間も1日それぞれ1コマ設けられており、受講生が各クラス（20人程度）に分けられ、講師の先生が持参してきた古文書を順番に一人一人声を出して読んでいく形式で進められた。私は正直驚いた。参加している台湾の院生達は、日本語が話せるだけではなく（講習会参加募集の際日本語がわかる人に限定している）、古文書もある程度読めてしまうのだ。中国語がしゃべられなくて参加している私は、この院生達と同じ土台にも上がっていないじゃないかと恥ずかしくなってしまった。

総体として講習会に参加したことは、私にとって大きな意義があった。私は、日本統治下台湾の医療・衛生を範疇として研究を進め行こうと考えているので、医療史を専攻としている陳君愷先生の講義を聞くことができたことは、今後、私の研究を進めていくにあたり非常に有益であったからである。また何よりも日本語が読めて古文書がわかれば台湾史も研究できると慢心している自分に気付くことができたことも大きな収穫の一つであった。

現在、私は、中国語を一生懸命勉強している。台湾へ留学し、いつかここに参加している人達と中国語で議論できる日を夢みて。

第三回台湾総督府文書講習会の講師と講義科目は以下の通りである。

第1日目（10月24日） 吳文星（台湾師範大学教授兼文学院院长）：台湾総督府文書学総論／廣瀬順皓（駿河台大学教授）：台湾総督府文書史料論／林元輝（政治大学副教授）：档案運用與研究課題－新聞史／陳君愷（輔仁大学副教授）：档案運用與研究課題－医療史

第2日目（10月25日） 吳聰敏（政治大学副教授）：档案運用與研究課題－経済史／廣瀬順皓（駿河台大学教授）：档案運用與研究課題－政治史／松金公正（宇都宮大学助教授）：档案運用與研究課題－宗教史／黄紹恆（政治大学教授）：档案運用與研究課題－人事資料／王泰升（台湾大学教授）：档案運用與研究課題－法律史

第3日目（10月26日） 高橋実（国文学研究資料館史料館教授）：戦後日本史料保存的発展沿革及今後の課題／中野目徹（筑波大学助教授）：日本歴史資料保存現状の紹介－国家級史料保存機構／久部良和子（沖縄県公文書館公文書専門官）：日本歴史資料保存現状の紹介－県級史料保存機構／高野修（前藤沢市文書館長）：日本歴史資料保存現状の紹介－町村級史料保存機構／栗原純（東京女子大学教授）：档案運用與研究課題－戸籍制度

「現代台湾文学シンポジウム」参加記
赤松美和子（お茶の水大学大学院博士課程）

2003年11月8日、東京大学中文研究室主催による「現代台湾文学国際シンポジウム—台湾鹿港から出てきた姉妹作家、施叔青・李昂の台北・アメリカ・香港・日本への旅」が、東大山上会館大会議場において開催された。李昂を始め、二名の在会評論家、また、作家・仏文学者・社会学者など多彩なゲストを迎え盛大に行われた。

中部彰化県に位置する鹿港は、18世紀に栄えた港町だが、20世紀には廃港となり、薄暗い路地に廃屋が立ち並び、いたるところに亡霊が出ると噂されたという。大規模な補修工事が行われた現在では、古都として内外から観光客を迎えている。施叔青（1945～）・李昂（1952～）姉妹は、その鹿港に生まれ育った現代台湾を代表する作家である。

山口守氏の挨拶で始まった午前中は、『ヴィクトリア倶楽部』・『香港三部曲』を書いた施叔青についてであった。作家であり、施叔青の友人である辻原登氏、並びに香港文学者の關詩珮氏は、『ヴィクトリア倶楽部』の時間の精緻さについてそれぞれ指摘。比較文学研究者である彭小妍氏は『香港三部曲』第三部『寂寞雲園』の語りの虚構性について論じると共に、戒嚴令解除前後に発刊された小説におけるポストモダンの手法についても言及した。また、黄英哲氏は施叔青のポジションとテキストとの関係性を丁寧に論じた上で、仏文学者の野崎欽氏は香港・英映画において互いに描き合わないイギリス人と香港人の関係性を指摘した上で、それぞれ「異邦人」としての施叔青の香港叙述に注目した。このように様々な角度からの議論がなされただけに、予定されていた施叔青の来日がかたくなかったことは、非常に残念であったと共に、施叔青、施叔青文学の謎を一層深めた。午後は、『夫殺し』・『迷いの園』・『自傳の小説』の作者である李昂についてであった。李昂氏と小川洋子氏との日台作家対談は、事前に「海」をテーマとした短編小説、李昂「海峡を渡る幽霊（吹竹節的鬼）」（藤井省三訳）・小川洋子「海」を競作した上で、藤井氏の司会により進められた。李昂「海峡を渡る幽霊」は、女鬼が大陸から海を渡って台湾に来るというおどろおどろしい話である。戒嚴令下の子ども時代、常に軍隊が海辺に待機していたため近寄れず、海は恐ろしいものだったという李昂の「海」イメージが反映されている。一方、李昂の作品により初めて「海」を政治的なものとして捉えたという小川氏の「海」は、タイトルには表されているが、小説そのものには現れない。だが瀬戸内海近隣在住の作家らしく穏やかさを湛えた作品となっている。このように非常に対照的な「海」のイメージが表された二作品、並びに対談は、『新潮』2004年2月号に掲載されている。

李昂と以前から親交のある上野千鶴子氏の講演「李昂論：民族・ジェンダー（性別）・歴史」は、日本人批評家（とりわけ多くの男性批評家）によって書かれた『夫殺し』の脱ジェンダー化批評に対する批判に主眼をおいた明解で刺激的な論であった。李昂文学がフェミニズム文学と言われていることに注目しながらも、問題視し解明には至らず、あくまでフェミニズム文学であることを前提として脱ジェンダー化の政治を批判した上野氏に対し、続く座談会で、台湾女性作家研究の先駆者である邱貴芬氏は、李昂文学を、フェミニズム文学とした上で、女性が「性」「情欲」を語ればフェミニズムのエキリチュールなのではなく、「どのように」語るのかを考えなければならないとフェミニズム内部の問題として問題提起すると共に、フェミニズムだけでは語り尽くせない李昂文学の特質を、台湾の歴史的記憶と民間伝説を大量に溶かし込んだ濃厚な「台湾性」として指摘した。また、作家茅野裕城子氏は李昂文学を「天然のエロティシズム」と評し、文芸評論家の小山鉄郎氏は日本文学の立場から李昂の空間性を指摘した。

多彩な議論に、120名の観客が聞き入ったたいへん盛況なシンポジウムであった。

2003年「日台文化交流フォーラム」に参加して
和泉司（慶應義塾大学大学院博士課程）

2003年11月9日、明治学院大学にて開催された「日台文化交流フォーラム」に参加した。11月5日から日本を訪れていた台湾作家訪日団を迎えてこのフォーラムは、現代台湾文学界を代表する作家諸氏に、日本で会うことのできる稀な機会であった。午前中は「台湾文化・文学の現在」と題し、藤井省三氏の台湾文学史と現代台湾文学事情に関する基調報告に始まり、鄭清文氏、李昂氏、朱天心氏ら作家諸氏によって台湾文学の過去・現在・未来についての意見が交わされた。中でも、文学における使用言語の問題や、「郷土」としての「台湾」の描き方にまつわる問題への対応について、鄭清文氏や李昂氏から多くの意見が述べられたことに、台湾での表現活動の最前線に立つ作家の苦悩と、そして誇りが垣間見えたように思う。

作家諸氏に続いて、漫画家にして現代日本文化評論家の哈日杏子氏、村上春樹を台湾で最初期に紹介した翻訳家の頼明朱氏の報告が行われた。両氏ともに、日台の文化交流をポピュラー文化のレベルで支えてきた人物であるが、私が特に気になったのは、哈日杏子氏が、台湾の若者は「台湾に文化はあるか？」と問われれば、きっと「ない」と答えるだろう、と指摘したことであった。かつて、台湾人作家龍瑛宗は、「邂逅」（『文藝台湾』1941年）という小説の中で、登場人物に「台湾に文化なんかあるものか」と語らせた。そこには、強力な権力・暴力を伴って押し寄せる「日本文化」の前に、「台湾」という存在そのものが危うくなっていたという状況が暗に示されていた。哈日杏子氏の指摘も、圧倒的な物量・資本によって押し寄せてくる日本をはじめとする海外からの文化によって、台湾の若者たちが、それを楽しみ・享受しつつも、自らの存在に不安を覚えている状況をとらえてのものではなかったか。

午後の部は、台湾原住民文学フォーラムが「『魂の文学』にふれる」というテーマを掲げて開催された。ここでは、台湾原住民の出身である作家・シャマン・ラポンガン氏、ワリス・ノカン氏を迎え、その報告を受けた。

ワリス・ノカン氏は、自らが作家となるまで、そしてなってからの困難な道筋についてを静かに語った。氏は原住民の地位獲得闘争における苦難を述べ、「原住民」としての誇りを持って生きていくために、「自らの歴史」を獲得することの必要性を強調した。シャマン・ラポンガン氏は、「私の島は台湾ではない」と発言し、蘭嶼島のタオ族の一人として、「台湾」を外から眺める視点を開示した。「台湾」を台湾島という範囲でしかみただけの私が無知というしかないが、氏の意見は新鮮であり、「台湾」という枠組みを無自覚に前提化してしまいがちな私の姿勢への大きな反省材料となった。

台湾文学というとき、漢族系台湾人作家だけでなく、原住民作家の存在を忘れることはできない。そういう意味で、今回の訪日団に代表的原住民作家の両氏の参加をみたのは、非常に有意義なことであった。

しかし、様々な事情が介在していたのかもしれないが、午前・午後で、「台湾作家」と「台湾原住民作家」とを区別して開催されたことには物足りなさを覚えた。「台湾文学」と言い「台湾原住民文学」と言う、この入れ子的な文学構成の中で、各々が区

別されてしまう状況は、漢族系台湾人作家と台湾原住民作家（このように区別した表記がすでに問題であるが）が文学活動の時間を共有する機会を逸したことはないだろうか。

台湾が多民族国家であることは今や疑いのないところであり、それぞれのエスニシティを尊重する方向性もすでに固まっている。このような状況下で、まさに「文学」こそ、「融和」や「同化」という流れではない、「台湾」という時空の「共有」の可能性を示すことができると私は信じている。故に今回、二部に分かれた作家諸氏が同じ時間・フォーラムを共有していたら、より豊かな意見交換が得られたのではなかったか、と残念に思うのである。

日本台湾学会活動状況

I 理事会

【第3期理事会常任理事会第2回会議議事録】（抄）

日時：2003年11月29日

場所：東京大学教養学部8号館3階306号室

1. 企画委員会より第六回学術大会分科会企画・自由論題についての提案がなされる。

(1) 企画数不足 (2) 人類学分野企画欠如 (3) 歴史学分野企画欠如などが指摘される。

2. 第六回学術大会までの日程について

(1) 理事会の件：理事会は6月4日夕方に実施する。

(2) 企画の最終締め切りは、3月初めまで。交流協会に経費申請を開始。

(3) 選挙監理委員候補者選定、次回の理事選挙に向けて、一人残して一人更新。

3. 「戦後日本における台湾関係文献目録」について

・暫定的合意事項：松田理事が暫定的に担当理事、事務作業のアルバイトを会員の北波道子さんをお願いする。

・当面の作業内容は、次の3点とする。①文献目録の誤謬の修正、問い合わせにのみ応じる、②新規会員に業績の一覧の提出を求め、それを掲載する、③会員からの新規掲載依頼に応じる。

4. 4年会費滞納者の退会について

・今回退会者を除いて現会員391名（一般会員277名、学生会員114名）。会費納入率は64%。

5. 新会員の入会について：10件

6. 会員名簿：レイアウトの問題で専攻分野は入れない。

7. 幹事交通費の件：基準は100キロ以上の距離とする。

(総務担当理事 下村作次郎)

II 定例研究会

【日本台湾学会 定例研究会】

第26回（歴史・政治・経済部会）

日時：2004年4月10日（土）15:00～17:00

場所：東京大学駒場キャンパス8号館306号室

講師：Dr. Phil Deans氏（School of Oriental and African Studies, University of London）

テーマ：Nationalism(s) on Taiwan and the issue of Japan（使用言語：英語）

（報告の概要）台湾では旧宗主国の日本に好意的な人が多く、関心を持った。小林よしのりや李登輝などの議論を研究した結果、「I love Japan」と「I am not Chinese」の意識に重なりがあり、台湾アイデンティティとつながると認識した。他にも謝雅梅・蔡焜燦・金美齡・周英明・張超英などの著作からこうした点が見られる（ただし小林が描きたいのは実は台湾でなく日本である）。「台湾人意識」は1895年までではなく、日本占領後に生まれた。戦後の台湾人が日本語を使ったのは、日本への愛ではなく、反国民党のあらわれ。今の日本は田中真紀子がクビになってから閣内が親台派でかためられた。

参加者は5名と少なかったが、報告後、活発な議論が行われた。主な質問は次の通りである。「日本の右派はどういう経緯で「藍」から「緑」に乗り換えたのか?」「本土派と言っても閩南系の老人の男が多い。世代や男女で程度が異なるのでは?」「選挙になると両極化し、対日観も両極化している。中間派の力は育つのか?」。また、議論の中で報告者が「独立支持の感情は今上がりつつあるが、将来中国が豊かになってくると下がるかもしれない」と述べたことに対し、参加者から複数の反論が出された。

(山田賢一)

【日本台湾学会 台北定例研究会】

第18回

日時：8月12日（火）18：30～20：30

場所：国立台北師範学院 行政大樓402室

報告者：若林正文（東京大学）

テーマ：台湾ナショナリズムの「忘れ得ぬ他者」（使用言語：日本語）

第19回

日時：9月26日（金）18：30～20：30

場所：国立台北師範学院 行政大樓506室

（社会科教育系討論室）

報告者：林崇熙（国立雲林科技大学文化資産研究所教授兼所長）

コメンター：范燕秋

(国立台湾科技大学人文学科助理教授)

テーマ：超越統獨與派閥－社區營造的一個可能性（使用言語：北京語）

第20回

日時：11月8日（土）14：30～16：30

場所：国立台北師範学院行政大樓506室

（社会科教育系討論室）

報告者：黄国超（清華大学人類学研究所碩士・成功大学台湾文学研究所博士班）

コメンター：黄智慧（中央研究院民族学研究所）

テーマ：從神聖到世俗－泰雅族改宗過程中的Utux（神靈）、Gaga（規範）、Niqan（信仰團體）角色變遷的探討（使用言語：北京語）

第21回

日時：2004年1月10日（土）18：00～20：00

場所：国立台湾大学 哲学系201号室

報告者：若松大祐

（国立政治大学歴史学系碩士班）

コメンター：薛化元（国立政治大学歴史学系主任）

テーマ：愛國者、或是失敗者？－1950年代後半期台灣、張學良的對自己歷史叙述（使用言語：北京語）

第22回

日時：2004年3月21日（日）18：30～20：30

場所：国立台湾大学 哲学系館 1F大会議室

パネラー：頼怡忠（台湾智庫國際事務部主任）、渡辺剛（杏林大学）、松田康博（防衛研究所）

司会：佐藤幸人（アジア経済研究所）

テーマ：綜觀2004臺灣的總統大選－公投・制憲・族群・地域（南北）（使用言語：北京語）

（編集部）

V 日本台湾学会報

『日本台湾学会報』第6号は、5月末に発行の予定です。なお、第7号の投稿受付締切は、例年より1ヶ月ほどは早い、本年9月15日を予定しております。投稿要項は、近日中にお手元にお届けいたしますほか、学会のホームページにも掲示いたしますので、ぜひご覧下さい。皆さまの積極的なご投稿をお待ちしております。

なお、第7号より、学会報の編集担当者はやまだあつし会員に交代します。

（学会報担当理事 川上桃子）

VI 学術大会

日本台湾学会第六回学術大会は、2004年6月5日（土）東京大学本郷キャンパス構内山上会館にて開催する予定となっております。会員の皆様はふるってご参加ください。なお、プログラム等詳細につきましては、ホームページ

（<http://www.soc.nii.ac.jp/jats/taikai/taikai6.htm>）をご参照ください。（編集部）

編集後記

選挙特集を組むため、1ヶ月おくれたの発行となりました。また、編集担当が台北長期出張のため、各所には多くご面倒をおかけしましたこと、こころよりお詫び申し上げますとともに、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

さて、いつになったら選挙後になるのでしょうか。年末までの長い道程になるかもしれませんが、次第に笑い話としての「混乱」・「不公平」ということばも聞こえてくるようになりました。静かにそれと付き合っていく、そんな毎日をおくることの難しさを感じる今日この頃です。

次号は6月5日開催の学術大会特集、10月末ごろに発行する予定です。研究集会の参加記や研究情報など、ご投稿お待ちしております。

（ニュースレター担当幹事 松金公正）

日本台湾学会ニュースレター 第8号

発行：日本台湾学会（代表 石田 浩）

印刷：株式会社 井上総合印刷

発行年月：2004年4月

〔日本台湾学会事務局〕

〒153-8902：東京都目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部第8号館若林研究室気付

T&F：03-5454-6416

〔ニュースレター発行事務局〕

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350

宇都宮大学国際学部松金研究室気付

E-mail:matskane@cc.utsunomiya-u.ac.jp